

報告 桑子敏雄先生集中講義・座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」

2010年12月25日(土)～27日(月)、旧野殿童仙房小学校で、桑子敏雄先生(東京工業大学大学院教授)を招いて、京都大学大学院教育学研究科の集中講義と座談会「空間が豊かであるとはどういうことか」を開催しました。桑子先生は、環境・生命にかかわる価値の対立・紛争を分析し、合意形成プロセスの理論的基礎を明らかにする研究を行なっている哲学者です。大学院生や生涯教育ゼミ参加者の他、地域住民や「環境文明21」の方々など30人以上が参加し、三日間じっくりと「談義」を深める機会となりました。

語り合い、体感し、そして学びへ――

第一日目は桑子先生から、「概念の森・ことのはの道」と題して、アリストテレスや行基などの思想研究から、地域での合意形成プロセスへの積極的参加にいたった履歴についてお話いただきました。その研究活動は、自然を身体との関わりでとらえ直す「環境の哲学」と、現場(フィールド)で人々と遭遇ながら誠実に考える姿勢が、貫かれていると感じました。午後は「風景と人生・まなざしの賑わい」というテーマで、歌川広重の「絵とき」などを楽しみながら、「風景と-ともに-あること」の自己理解の大切さを学びました。風景との関わりは、それを見る多くの人々による参加と意見表明によって、さらに豊かになっていくことが分かりました。



「ソバ打ち」体験

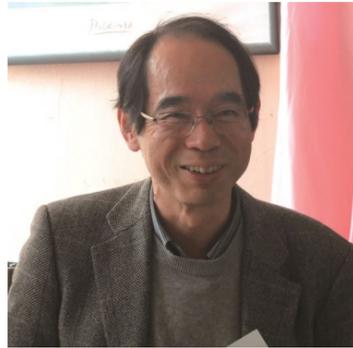
そのあと一休みしてから、「第6回野童いなか塾」として、参加者全員で「ソバ打ち」を体験しました。あれこれ話しながらソバ粉を練り上げ・伸ばし・切っていく共同作業は、「合意形成」そのものであるように感じられました。夜は「空間が豊かであるとはどういうことか」と題して座談会を開催し、桑子先生からは「空間の履歴」という言葉で、風景に埋め込まれた地域の記憶を、現在の生活につなげて掘り起こすことが提起されました。またNPO法人環境文明21の松下忠義さんから、環境問題に関する市民からの政策提言等について報告がありました。質疑では自然と人の関わりや、社会生活と環境保護の両立のあり方について、活発に意見が交わされました。

二日目は桑子研究室のメンバーで、佐渡地域での合意形成の実践にも関わってきた、豊田光世先生と高田知紀さんに報告していただきました(2面・3面も参照)。豊田先生はトキを語る「移動談義所」にファシリテーターとして参加してきた経験から、住民自身による問題解決をうながす「談義」の場づくりについて発表されました。また高田さんは天王川流域の「多自然川づくり」の実践から、多様な住民の声と向き合いながら合意形成を目指すプロセスが紹介されました。お二人とも現場で実践に関わりながら、その意味を論理的に説明する研究に取り組むという面でも、私たちにとって学ぶことが多いお話でした。

最終日は桑子先生から、地域性を踏まえた「ローカルコモンズ」(地域で共有する資源・空間)の包括的再生の思想・技術として、「ふるさと見分け」が紹介されました。それは空間に込められた人々の関心・懸念や「空間の履歴」を読み取りながら、風景を五感で味わう「空間の価値構造認識」を共同で行なう作業です。この日は実際に小学校の近くで「フィールドワークショップ」を行ない、地域の水の豊かさや開拓の足跡に改めて気づかされるなど、多くの発見がありました。

桑子先生たちのお話を聞くだけではなく、童仙房の地で同じ時間と空間を共有し、突然の大雪に見舞われた地域を一緒に歩いたことは、私たちにとって貴重な経験でした。異なるフィールドで私たちと同じ志を持って、地域に関わる実践と研究を進めている方々と共に、今後もインターローカルな(地域どうしの)交流を進めたいと思います。

(吉田正純)



桑子敏雄先生



「ふるさと見分け」

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.16

地域を歩いていると「共に生きる」という言葉は「ああ、こんなことだったのか」と不意に納得するときがある

それはこちらの過剰な意味づけの結果なのかもしれないが言葉が地についた言葉として蘇ってくるさまは心地よい

ありあわせの手持ちの材料で 今ある道具だけを使って「プリコラージュ」(手仕事)をすること
このことと 自然と共に生きるということは補いあっているのだろう

機械を使わない手仕事は どこかで中途半端さや、いい加減さを包みこんでいる
確固たる信念としてでなく なんとなくという不確かなところが面白い



今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL：075-753-3075, URL： <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田 199 番地 2
会長 中村富士雄／副会長 内藤芳男

2011年3月20日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：山口記世
制作：(株)松籟社

まなざしの賑わい——佐渡と童仙房をつなぐもの

2010年12月に童仙房で開催された桑子敏雄先生の集中講義（4面に詳報）に、豊田光世先生と高田知紀さんも参加してくれました。先生の教え子であり共同実践者でもあるお二人は、佐渡島をフィールドとして、自然環境を包括的に再生するための住民の合意形成という問題意識をもって、実践と研究の両面で活躍されています。

この号ではその豊田先生と高田さんに、童仙房を訪れた感想を交えて、それぞれの活動について書いていただきました。私たちと同じような目的をもちながら、異なる視点をもつ方々と交流することで、これからの野殿・童仙房での活動にも、多くのヒントが得られるのではないのでしょうか。

地域へのまなざし

——佐渡の「談義所」での主体育成

豊田光世 Mitsuyo TOYODA 兵庫県立大学講師

童仙房を訪れて心に強く残っていることは、地域の未来を熱心に語る人びととの出会いです。「主体育成」という考えが、地域づくりや環境保全の推進において重視されていますが、自らの手で地域をよくしたいと願う人びとの存在こそが、地域の大切な宝物なのだと感じました。

よりよい地域環境の実現につなげていくには市民参加のプロセスが不可欠であるという見方が主流となり、幅広いステークホルダーを認識しながら、多様な主体の参加と協働を促すことが求められています。このような動きが具体化していくためには、市民参加の制度やしきみを整えるだけでなく、人びとの間に「自分たちの手で暮らしやすい地域を作っていこう」という意識が芽生え、思いを行動に変えていく力が高まることが重要です。主体育成は、市民参加を実現するための根本的な課題だと考えられます。

私は、環境保全に主体的に関わる力の育成をテーマに、協働の実践活動にもつづいた研究を行ってきました。東京工業大学桑子研究室に博士後期課程の学生として在籍していた頃から、トキの野生復帰事業に取り組む新潟県佐渡市を活動の拠点としています。

桑子研究室は、環境省の研究助成を得て、2007年4月から



3年間、佐渡島で「佐渡めぐりトキを語る移動談義所」と名づけたワークショップを開き、トキとの共生に向けた合意形成の研究を進めました。「談義所」は、「義」すなわち「地域にとって大切なこと」を談ずる場を意味します。島内の広いエリアを移動しながら計43回の談義所を開き、トキの野生復帰事業に対する人びとの思い、不安、夢などを明らかにするとともに、よりよい地域環境の実現に向けて、実行可能な合意を重ねていきました。この活動では、主体育成も大きな課題でした。地域のエンパワーメントを図り、豊かな環境づくりの活動を促すために必要なことを、話し合いを通して考えていきました。

その結果、①廃校を活用した交流拠点「岩首談義所」の開設、②地域の多彩な恵みをつなぐ「包括的再生」という自然再生の理念の創出、③「佐渡島加茂湖水系再生研究所」という汽水域整備のための協働の場づくりなどが実現しました。

現場での活動を通して、福祉、教育、産業、交流など、地域の人びとのさまざまな関心をつないでいく努力が必要だと実感しました。佐渡の場合、トキが重要な地域資源ですが、2008年9月の放鳥前は、必ずしもトキへの関心が高かったわけではありません。トキと地域の諸課題をつなぐ視点が必要であり、「包括的再生」の理念は、こうした視点を導くための手がかりとなりました。

佐渡にはトキがあるけれど、童仙房には一体どんな資源があるのだろうか……「ふるさと見分け」というフィールドワークを通して、京大や地域の人たちと一緒に考えました。小学校を出発して、野殿方面に向かう山道を登っていくと、あちこちから水の音が聞こえてきました。小さな沢から水路にこんこんと水が注ぎ、田んぼの周りをめぐって流れる様子を見て、水の豊かな風景が童仙房の魅力の一つではないかと認識しました。山の上の集落であるのに、これほど潤いがあるとは！大地が水を保つ力に驚きました。「水」を中心にその他の資源や課題を考えていくと、どんな地域像が見えてくるのでしょうか。童仙房らしさを生かした地域づくりを通して、これからも交流が続けられたらうれしいです。

自然から見えてくるもの

——天王川の「多自然川づくり」

高田知紀 Tomoki TAKADA 東京工業大学大学院

「豊かな川」とはどのようなものでしょうか。そのような問いをあらためて自分自身に投げかけたのは、2010年のクリスマスに童仙房を訪れたときのことでした。

桑子先生が京都大学の集中講義の講師として招かれ、私と同じく桑子研究室出身の豊田光世さんも同行することになりました。ある朝、私たちは童仙房山荘から小学校までの道を歩いていました。その道中で、小学校のすぐ近くを流れる小さな川に目が向きました。一見するとどこにでもあるようなコンクリートで護岸された川です。しかし、私たちはその川がとても面白いと感じました。なぜなら、コンクリート護岸で囲まれた河道のなかで、水が自ら意志をもつかのように蛇行して流れていたからです。河道には流れてきた砂が堆積し、そこに植生が繁茂していました。それに伴い、水の流れる幅が広いところや狭いところ、あるいは流れの速いところや遅いところができており、小さな川ですが実に多様な表情をもっていました。このような川は、単一的な流れの川に比べて、様々な生き物が生息できる可能性をもっています。また、堆積した土砂が小さな「洲」を形成しているため、人びとはそこに降りて容易に水と触れ合うことができます。このような環境が、私たちにはとても興味深かったのです。

日本の多くの川は、経済成長および土木技術の発展に伴って、コンクリートで護岸され、直線的な河道となってしまいました。そのため、生き物たちは次々に姿を消し、また人間も川に近寄らなくなりました。そこで国は、「多自然川づくり」という河



童仙房を流れる川

川管理・整備の手法によって、多様な生き物が生息し、また地域の生活に溶け込んだ河川空間を再生する取り組みを積極的に展開しています。桑子研究室は2008年から、新潟県佐渡島の天王川という小さな川の多自然川づくり事業に携わっています。天王川の事業では、計画が白紙の段階から、地域住民、専門家、行政関係者が同じ場で



天王川の「多自然川づくり」

話し合い、再生計画をつくっていきます。私たちはこの事業で、合意形成マネージメントチームとして、ワークショップのデザインや話し合いのファシリテーションなどを行なっています。天王川再生の合意形成プロセスにおいては、ワークショップで話し合うだけでなく、必要に応じてフィールドワークを実施してきました。現場に立って議論することで参加者は、自分ひとりの視点からは見えなかった天王川をとりまく様々な現状に改めて気が付きます。そのプロセスで、人びとの川に対する様々な思いや感情が顕在化してきます。大事なのは問題・課題だけでなく、川のもつ様々な価値や魅力を積極的に見いだそうとする姿勢です。それらの価値や思いを共有することで合意形成は、協働とコミュニケーションをとって豊かな川をつくっていく創造的なプロセスとなります。

「多自然川づくり」を展開するときの最も重要な課題は、再生後の川の姿をどのように描くかということです。その際には、川に対する人びとの多様な思いと科学的知見の両方をふまえながら計画案をつくりあげていかなければなりません。しかし、河川を取り巻く自然的・社会的環境は非常に複雑なため、一度変わってしまった川を昔の姿そのままに再現することは極めて困難です。では、どうすればよいのでしょうか。私は、人びとが、川にかかわる生きとし生けるもの全て、さらには水や石・土といった河川を形づくるすべての要素にまなざしを向けながら、話し合いを積み重ねていくほかに方法はないと考えています。協働行為によって川を豊かにしていこうとする不断の努力の向こうに、徐々に川のあるべき姿が見えてくるのではないのでしょうか。そういった意味で、私たちが出会った童仙房を流れる小さな川には、まだ人びとに認識されていないたくさんの価値や魅力が秘められているのでしょうか。次に童仙房を訪れた際には、あの川に足を浸して、魚や虫を観察してみたいと思います。